
歯を剥き呪うアヲの果て

荒也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歯を剥き呪うアヲの果て

【Nコード】

N5856E

【作者名】

荒也

【あらすじ】

旅に疲れた旅人は、いつだってそこへ足を運んだ。小さな村の歌姫と、美しい旅人の短い話。

峠には主人が道楽で運営する宿と、天使のような歌姫が居る。

もつお決まりの文句を何度旅人は聞いただろつ、知ってる、と小さな男の子の頭

を撫でて壁沿いの椅子から立ち上がった。小さな土産物屋から出ると、

ほんの少しだけ豊かになった町並みがある。街路を賑わす道化、彼もまた変わらな
い。

「この辺に、安い宿はありますか」

旅人が声を掛けると、道化師は嬉しそうに顔を上げ、それから奇怪なペイントを
施した顔が驚きを映し。

「久しぶりだなあ！ 元気してたか？」

「そこそこね」

そう言つてぎこちなく笑つた彼に、並んで道化は尚も嬉しそうに顔を緩ませ。旧

友、というほど親しかったつもりは無いが、道化のほうはどうやら旅人をそんなふう
に考えているらしかった。

「内乱は」

「収まつたよ、ある程度はな……お前さん、知ってるか？」

「何を？」

穏やかに聞き返した旅人の、青い目は。

知つていてなおそれを確かめようとするように、道化の顔を覗き込んだ。

くる、くる、……来る。彼が。

舞って、舞って、……待って。彼を。

丘の上は、幼い日によく彼と来ていた場所だった。白い花咲く丘、町外れ、海と

空の境界線を見ながら。ぐるぐると回る視界には青しか映らない。

舞い続ける彼女の長い髪もまた透き通るように蒼く、服も示し合
わせたような薄

青色。もうティーンなどとうに通り越しているのに、なお少女の面
影を残す顔が、

丘を登ってくる人影を向いて目を見開いた。それから、踊るのを辞
め、じっと待つ。

顔を判別できる距離になると、小首を傾げて笑みを浮かべた。

「おかえり、なさい？」

「すぐ、出て行くけどね」

旅人はそう言って苦笑する。こんな苦々しい表情ばかり得意で、
どうしようもな

い人だ。そう、彼女は思う。

隣に並んで、崖のほうへ歩いていく。

進むごとに強くなつていく風を掻き分けるようにして進む、足元
で草が踊る音が、

心地良い。

彼女は小声で歌いながら、視界を遮る髪を抑える。旅人はその様
子をなるべく見

ないようにしながら。それでも視界の端には、彼女の白い肌がちら
ついた。

「ねえ、どう？」

「相変わらず。嫌なことばかりだ」

「人、好きにならないの？」

「さあ……好き？　なのかな。そのへんの感情はまだよくわからな

い

そう、とすこし残念そうに頷くと、彼女はそれきり会話を持ちかけてくることは無く。

ゆっくりと歩いていた足が止まる。海を見下ろす崖の、柵に寄りかかって。

「ねえ、あなたは知ってる？」

「何を？」

「最近、この町が内乱の暴徒に襲われないのは、時々警備兵さんたちと一緒に、も

のすごく強いにわか傭兵さんが戦ってくれるからなんだって」

「にわか傭兵さん、ねえ」

「うん。にわか傭兵さん。ふもとの町の外れの女の子たち話すよ、すぐく、かつこ

いい人なんだって。

お礼を、言いたいな」

そう言っ、旅人の顔を覗き込んだ。透き通った空色の目が、深海色の彼の目を見上げ、笑う。

歌うように言葉を紡ぐ。長調の調べ。

「夜色の髪に白い肌、開く双眸は艶やかな翠。女性のようにしなやかに、男性のよ

うに猛々しく。薙ぎ払う剣は誰も貫かない」

叙事詩のような表現に旅人はやはり苦笑しながら。

確かに、誰かの為に何かをしたいと思っただんだ、と。

言えば彼女は、さも当然のように肯くのだろう。知ってたよ、と。あえて知らな

い振りをしながら。

寄せては返す波を見ていた。

「ねえ、こんな詩があるの」

「うん？」

「海は、白い波でもってところどころ牙を剥いて、空を呪ってるんだって」

彼女の一等好きな詩であった。

何度が聞いたことがある、その切り出し方はいつも変わらない。

「私のあおは、呪う藍あおなのかしら」

呪われるほどに清らかな、あの空の蒼には決して届かないと知りながら。

空へと伸ばす彼女の細い手に、負けず劣らず白い彼の手が重なった。

「呪う役はおれがやろう」

君は矜ほこり高い蒼でいい。

言外にそんな意思を匂わせて。彼女の目から逃げるように彼は青い目を逸らし、

閉じた。風に弄られ、真紅の長い髪は天辺から真っ黒に染まった。

薄く開いた目は

深い翠色に。

にわか傭兵さん、と歌姫が小さく笑った。

寄せては返す、波を見ていた。

抜いた剣は曇っていた。

彼女の詩にひとつ誇張、もしくは間違いがあるとすれば、それは「誰も貫かない」というところ。

実際はそう、この剣がこんなに曇って輝きを亡くしてしまうほどに。旅人が幻視

をかけなおして髪の色を紅く戻すと、目の色も藍くなる。連動してそうなるように

なっていた。

「定住はしないのかい？」

店の主人は残念そうな顔で首を傾げ。

「する気はないです。もしこの状況が不幸だと思ったなら」

すっかり色あせてしまった外套を羽織り、荷物を纏める手を休めて、旅人は表情

の少ないその顔でじつと店主を見つめた。

「とか、彼女に好きな人が出来たなら、その人と暮らせるようにしてあげてください」

「

消極的だねえ。あの子は君のことが大好きだよ」

彼は苦笑し、一度だけ礼をして扉を開けた。

大空を呪う藍もいつしか空気に混ざって少しずつ、すこしずつ澄んでいくのだから

う。呪われる高みの蒼も、たまには海に降り注ぎ藍になるのだから。

ひとまずそれを、彼女に上手に伝えられるようになるまでは、旅人は旅人のまま

で居るのだから。それができるようになればまた、別の理由を捜して。

それを舞って待つてくるくる来ると、歌姫もまた此処にとどまり。

旅人が一度だけ振り返ると、丘の上で彼女が踊っているのが見えた。

F i n e .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856e/>

歯を剥き呪うアラの果て

2011年1月14日03時50分発行